

東日本大震災 復興・支援活動ニュースレター カトリック仙台司教区・カリタスベース

発行人：平賀徹夫
〒980-0014 仙台市青葉区本町 1-2-12
カトリック仙台司教区事務局
Tel.022-222-7371 Fax022-222-7378
1) 義援金振替口座：02260-9-2305
名義：カトリック仙台司教区本部事務局
2) 支援金振替口座：00170-5-95979
名義：カリタスジャパン

東日本大震災から丸8年も過ぎ、復興・支援活動の有りようも、次第に変わってきました。被災者の方々が変われば、支援の仕方も変わってくるのは、当然です。カトリック東京ボランティアセンターを運営母体に活動していた「カリタス南相馬」が、「一般社団法人 カリタス南相馬」として、新たな歩みを始めました。福島以南の南相馬など地域の方々と共に、さらに歩いていくためです。

3か月ごとに行われている、「全ベース会議」と「仙台教区サポート会議」が元寺小路教会で開催されました。ここでも「発災10年後には、自分たちが関わっているベースは、どのようになっていったらいいのか」、という議題で活発な討議がなされました。すぐ結論の出るものではないので、継続審議されることになります。その2つの会議の様子をお知らせいたします。

「一般社団法人 カリタス南相馬」設立

カリタス南相馬 所長 畠中千秋（聖心会修道女）

2019年4月22日、カトリック東京ボランティアセンター（以下、CTVC）を運営母体としていた「カリタス南相馬」は、「一般社団法人 カリタス南相馬」となりました。カトリック東京教区の組織であるCTVCと分かれ、一般社団法人となったのは、これからも長く、そして、これまで以上に教会という枠を超えて、この地域の方々とともに歩いていくためです。特に、東京電力福島第一原子力発電所（以下、原発）事故の被災地の人々と東京をはじめ日本全国、世界も含めて多くの方々をお繋ぎすることをこれからも続けてまいります。

日本カトリック司教団およびカリタスジャパンは、2011年より10年間は、東日本大震災の復興支援を継続することを約束してくださっています。しかしながら、福島県浜通りにおいては、それ以降も支援活動が必要と感じています。そのため、教会の皆さまや協力者の方々に支えていただかなければ、この活動は継続できません。皆様からの物心両面にわたるご支援も細く長く継続していただけることを期待申し上げます。どうぞよろしくお願いたします。

2012年6月1日、ボランティア拠点として「カリタス原町ベース」が開設され、原町教会の方々と遠方からのボランティアさんたちと共に、ご支援いただいた物資（二本松の野菜も含めて）を仮設住宅にお届けするボランティアが始まりました。また、仮設集会所に開設された「真こころサロン」で被災者の方々とのおつきあいが始まりました。そして、その頃から、南相馬市社会福祉協議会の災害復旧復興ボランティアセンターの屋外活動も始まり、さまざまなニーズに応えるボランティアの方々にも宿泊場所と食事を提供することなど、今も続いています。その時々必要に応じて対応してまいりました。これからもこの姿勢は変わらないと考えています。

原発事故、放射能による避難指示の問題を抱えた福島県浜通りでは、この先も長くボランティア活動が必要であると考え、借家であったカリタス原町ベースを移転して、カトリック原町教会とさゆり幼稚園と同じ敷地内に、カリタスジャパンの支援を受けて、ボランティア宿泊施設を兼ね備えた活動拠点となる建物を建てさせていただき、2016年12月16日、名前も「カリタス南相馬」とあらため、開所しました。また、東京・小金井の「聖ヨハネ祭」の支援を受けて、暗い夜道を照らす共同の看板—カトリック原町教会・さゆり幼稚園・カリタス南相馬—も設置することができました。



一般社団法人設立総会の様子

カリタス南相馬の外観

これまでの経緯をまとめてお伝えします。

2011年3月11日の東日本大震災のあと、仙台教区サポートセンターが設置され、岩手県、宮城県、福島県の太平洋側にあるカトリック教会を中心に、被災地支援の拠点が設置されていきました。また、同年4月、カトリック東京大司教区による東日本大震災復興支援活動のため、CTVCが設立され、7月から原発に一番近いカトリック原町教会（原発より25kmの所にある）と連携を始めました。しかし、この地域は「緊急時避難準備区域」という指定が同年9月末まであり、ボランティア活動を開始する状況にはありませんでした。それが解除され、南相馬市鹿島区と原町区には30以上の場所に約1万人のための仮設住宅が建設されました。



「聖ヨハネ祭」の支援を受けて、敷地入り口に建てられた看板

そして、仙台教区、東京教区の承認を受け、2019年4月22日、「一般社団法人カリタス南相馬」の設立総会を開くことができました。代表には、CTVC責任司教の幸田和生司教様にお引き受けいただきました。また、菊地功大司教様にご列席いただき、「これからは大変になるので、ますます頑張るように」と励ましのお言葉をいただきましたことも感謝申し上げます。

キリスト教の精神に基づき、人と人との一つのつながりがいつか世界中の人とのつながりになることを信じて、福島県浜通りにある「一般社団法人カリタス南相馬」という小さな片隅で、出会う人と人との関わりを紡いで、山積する課題—放射能を含む環境問題、原発・廃炉を含むエネルギーの問題、生き方の問題など—「誰も排除されない持続可能な社会」を皆様と共に目指してまいりたいと思います。

今後とも、どうぞよろしくお願いたします。

発災10年後を見据えて

第36回、第37回全ベース会議・第50回仙台教区サポート会議

仙台教区サポートセンター

東日本大震災被災地で活動をしているカリタスベースの責任者が集い、活動の報告や情報共有を行っている全ベース会議を、2019年になってから、2月22日(第36回)と5月10日(第37回)の2回行いました。

司教団は東日本大震災の発災から10年を迎える2021年3月まで支援を続けることを表明しており、多くのカリタスベースの活動資金となっているカリタスジャパンからの援助金も、この時期で終了することから、2021年3月はカリタスベースによる支援活動の大きな節目となります。それぞれのベースでは、2021年3月をどのように迎えるかが課題となっており、2度の会議の中でも話し合われました。



各ベースの状況として、宮古ベースは活動の主体を札幌カリタスから地元の宮古教会、盛岡の3教会へシフトしており、現在は月に一度の宮古教会、山田町町内の仮設住宅2か所、また、台風による水害で被災した岩泉町1か所でカフェを開いています。これまで、年に11回だった札幌の世話人の参加を今年は6回に減らし、カフェの開催日程を見直すなどして、地元教会の力で続けていく体制を模索しています。

2013年にいち早くNPO法人となったカリタス釜石は、教会でのサロン「ふいりあ」、復興住宅でのコミュニティづくりの支援、グリーンケアを兼ねた食事会、復興住宅の住民を招く「お茶べり広場」、ファミリーサポート事業など、きめ細やかな活動を続けています。

大船渡ベースは、手芸サロンやママサロンなどベースでの様々なサロン活動のほか災害公営住宅でのサロン、買い物難民となっている地域住民向けの買い物送迎、高齢者や滞日外国人への個別対応などを行っています。

南三陸ベースは法人化をめざし、2月に任意団体を設立しました。2018年に続き、今年も田んぼでのコメ作りに挑戦し、自分たちで育てたササニシキを使ったおにぎり作りのイベントを通して、復興住宅の住民や幼稚園との交流を行う予定で、このほかにも街づくりのための活動を積極的に行っています。

石巻ベースはベース1階でのサロン活動を主に活動を続けています。オープンから7年以上経った今でも、常連に混ざって初めて来られる方もおり、平日の日中に平均して20人ほどの利用があります。

カリタス南相馬は4月22日に一般社団法人を設立しました。活動はこれまでと変わらず、サロン活動、浪江町での屋外活動、幼稚園児の見守り活動などを行っています。

さいたま教区が福島県のいわき教会、聖母訪問会橋葉修道院と協力していわき市内の復興公営住宅で活動している【仮称】カリタスいわきは、現在、月に一度、2か所でサロンを開いています。このほか、震災、原発事故の記憶の風化を防ぐため、さいたま教区の信徒が被災地へ出向く機会を作っていくと計画しています。

カトリック東京ボランティアセンターは、福島市の松木町教会に協力して「コスモス宮代」(浪江町から福島市の宮代仮設住宅へ避難していた方々のコミュニティ)との交流を続けています。仮設が閉鎖されてから、住民の方々が浜通りと中通りへ分散したため、交互にイベントを行い、また、全員が集う催しも行いましたが、今後は戸別訪問の形での関わりも行うということです。記憶の風化を防ぐために続けている講演会シリーズでは、6月に元南相馬市長の桜井勝延さん、9月に「おだかぶらっとほーむ」の廣畑裕子さんを迎える予定です。

活動報告の後、2021年3月以降の活動をどうしていくかということについて、各ベースの展望が話されました。現地で顔と顔をあわせて活動しているスタッフにとっては、震災後10年経ったからといって、ベースの活動をやめるわけにはいかない、やめられない、というのが正直なところですが、資金がなければ現状通りの活動を続けていくことは不可能です。法人化して経済的にも独立し、これからさらに長期的に地域と関わろうとしているベース、教会活動のひとつとして、また、ボランティアの力でサロン活動を続けていけないかと考えているベースがあります。東日本大震災のあと、地域に向かって開かれた教会の扉を閉じているためにはどのような方法が考えられるか。話し合いの中では、はっきりとした結論は出ませんでした。これまで向き合ってきた地域の方々との関わりを大切にしながら、謙虚に自分たちの活動を振り返り、整理することが、今後の大きな課題であると感じました。

全ベース会議の同日午後に行われている仙台教区サポート会議(以下、サポート会議)は、5月10日の開催で、50回目を迎えました。東日本大震災後、被害の甚大さと及ぼした被害範囲の広さと福島原発事故の影響から、日本の教会全体で仙台教区を支えようという決定を司教団は決議しました。こうして始まったのが、このサポート会議です。

今回の会議は、3人の司教、3人の司祭、1人の信徒、3人のオブザーバーというメンバーで話し合われました。

まず、仙台教区の被災地関係の司祭の異動について小野寺洋一神父が紹介し、次いで、3管区の近況報告がなされました。

その後、カリタスジャパンからの経済的支援が打ち切られる2021年3月31日以降の活動の方向性をどうするのかについて、活発な意見交換がなされた後、次回8月のサポート会議までに、仙台教区は教区の「新しい創造」第5期「計画素案：方針」を作成、大阪管区は2つのベース拠点をどうするか提案を示すことになりました。

次回予定として、第51回仙台教区サポート会議は、8月22日、カリタス南相馬の企画案にそって、原発事故の被災を受けた地域を中心に現地見学を行い、翌23日は原町教会を会場に、午前は福島で活動するグループの報告を聞き、午後、全ベース会議とサポート会議を開くことを決定し、会議は終了しました。

